

報告 1 : 宋曉煜 (愛知大学国際問題研究所補助研究員)

『天演論』と『勸学篇』の関連性から見た嚴復の政治思想
——二段階的発展及び各段階の政治モデル

1897年の末、嚴復が翻訳したスペンサー著『社会学研究』の翻訳『斯賓塞爾勸学篇』と、ハクスリー著『進化と倫理』の翻訳『天演論』が、ほぼ同時期に『国聞彙編』という旬報雑誌に連載され始めたことは、注目に値する。

『斯賓塞爾勸学篇』(以下、『勸学篇』と略す)は先行研究が皆無に近いほど少ない。その一方、『天演論』はかなりよく研究されている。しかし、『天演論』に関して、嚴復の翻訳作業の細部から彼の政治思想を読み取ることは十分になされたとは言えない。しかも、『天演論』と『勸学篇』を比較して分析する研究は見当たらない。

本稿はまず、『天演論』と『勸学篇』の関連を明らかにし、『天演論』と『勸学篇』の比較研究の妥当性を呈示する。それから、とりわけ嚴復による訳文の加筆、削除、語彙の使用法などに注目しつつ、『天演論』と『勸学篇』の翻訳作業に見られる共通点を探り出し、嚴復の時局論文、先行研究などに照らしながら彼の政治思想を読み取ることにする。

原著と訳書のテキストを比較対照した結果、『天演論』と『勸学篇』に嚴復の類似した政治思想とそこに潜む大きな矛盾が明らかになった。彼はスペンサーの社会有機体説、社会進化論に魅了され、イギリスを理想的政治モデルと考えた。イギリス人の自治能力や愛国心などを羨望し、訳文でイギリスのマイナス面を糊塗して、中国の読者にイギリスの理想的政治モデルをアピールしようとした。しかし、イギリス型の近代化は長い時間をかけての成果であり、中国の近代化にはそのような時間の余裕はない。このようなジレンマに陥った結果、彼はイギリスを第二段階に至ってからの模倣対象とし、近代化の第一段階における模倣対象はピョートル 1 世が主導するロシアに設定した。そしてこの第一段階では、封建的国家の統治者である君主に民種水準の向上を主導し、民の忠誠心を喚起する役割を担わせるべく、訳文全体で統治者の役割を強調し、聖人の出現に期待を寄せる姿勢を見せたのである。